

「～てから」と「～たあと」と「～たのち」について

On the Sentence Pattern “-te kara”, “-ta ato”,
and “-ta noti”

清水 泰生

(四国学院大学非常勤講師)

「～てから」は「～たあと」の類義表現であり、「～たのち」は「～たあと」の文語表現だと言われている。本発表で「～てから」と「～たあとで」「～あとから」「～あとで」「～あとに」及び、「～たのち」などの表現との違いについて、先行研究をふまえながら、アンケート、用例を基に考察した。

研究結果は以下の通りである。

㊤「～てから」

「～てから」は安達（1995）（※1）がいうように継起、継続、起点の意味用法がある。

- (1) 新聞を読んでから出かけた。（継起）
- (2) あのことがあってからずっと気分が悪い。（継続）
- (3) 彼が死んでから一年たった。（起点）

継起の「～てから」は動作、出来事の連続性を示すだけでなく、後件の条件規定を示す。後件の条件規定とは、後件の起こる前提に、いろいろなできごと、動作が考えられ、そのなかから一つを取り出され、それが前件であるといえる。

また、「～てから」の動作の連続性は必ず時間的に連続的でなくても構わない。連続性は話し手の主観的なものである。

㊦「～たあと」

時間の前後関係を表わすだけで後件の条件規定をしない。また動作の連続性はない。また「いつ」「誰」のような疑問詞が続く場合、「～てから」は使いにくい。一方、「～たあと」は、ただ単に前件と後件の時間の前後関係を示しているので、「いつ」「誰」などの疑問詞と結びつく。

- (4) 彼が監督をやめたあと誰が監督になるだろうか。（※2）
? やめてから

後件が「～である」文等の状態文の場合「～てから」は使わない。後件は動作、出来事を示す文である。

(5) Aさんが出ていったあと手紙が置いてあった。
×てから

㉞「～たあとで」

「～てから」の継続、起点の用法は「～たあとで」に置き換えられない。後件が状態の場合、使われない。また、久野(1973)(※3)が言うように後件が特定の時間を表す時には使いにくい。

(6) ×ここへ来たあとで、一度も町へ行った事がない。

(7) ×戦争が終ったあとで三十年たった。

「あと」の前に「少し」「かなり」などの程度副詞と共起することができる。この場合、「～たあとで」「～たあとに」の場合は自然であるが、「～たあと」の場合、不自然である。

(8) 1500メートル走った少しあとで3000メートルを走った。
?あと

(9) 彼が出かけた少しあとに彼女が来た。

㉟「～たあとに」

前件で作り出した空間を後件が埋める働きをする。継起、起点の「～てから」は「～たあとに」に置き換えられない。

(10) 走ったあとに爽快感を感じた。

(11) ×戦争が終ったあとに三十年たった。

(12) ×ここに来たあとに、一度も町へ出たことがない。

㊱「～たあとから」

同種の動作や反対の動作が続いて起こるときに使われる。

(13) Aさんが脱会したあとからBさんが入会した。

(14) Aさんが来たあとからBさんがやって来た。

㊲「～たのち」

「～たあと」とさほど差がないが「～たのちで」「～たのちから」は使わない。

(15) ×仕事をしたのちで食事にしよう。

(16) ×彼が来たのちから彼女がやって来た。

注

(※1) 安達太郎(1995)「テカラとアト(デ)ー出来事の継起的接続」『日本語類義表現の文法(下)複文・連語編』くろしお出版

(※3) 久野 暉(1973)『日本文法研究』大修館書店

(※2) 例文の許容度…、×…使えない ?…不自然